

ふりかえれば



長鄉智子

昭和五十一年に開園した本園も、今年ではや七年目を迎える。私にとつて幼稚園の勤務は初めてのことであり、開園にあたつては、全エネルギーを集めさせて、ようやくこぎつけたような次第である。そのせいか、格別の愛着が、この園には感じられる。今では、もう私の生活の中で大きな比重を占め精神的な面でもこの園に支えられて、いる部分が少なくない。

おもえば、昭和五十二年の四月一日に辞令を受けたが、職員は保母経験五年の私と新任教諭、園長は、小学校長と兼務というスタートであった。入園式は、五日と目前に迫り、準備といつても、机どころか鉛筆さえも揃わぬ気はあせるばかりであった。その上、同時に二つの園が開園されたため、労力も

か倍増されるということになってしまい、深く考えている余裕など全くなく、ひたすら行動へと駆けださなければならなかつた。その中で何よりも心の負担は、専門の指導を受ける人がいかつたことである。参考にするもののがなく、何もないところからの出発が、こんなにも大変なことかと痛切に感じさせられた。すべて自分の力で、運営をすすめなければならないことは、能力不足の私には重荷であつた。

両園かけもちで右往左往しながら迎えた入園式。しかし、なぜか、この式当日については、記憶していないのである。大切なこの日を写真の中でのみ思いだされるだけとは、何ということであろう。煩雜の中に、入園式が埋もれてしまったのかかもしれない。

子どもたちも、父兄のかたにも申し分けないと連日、残業が続いた。それに不満をもつ職員もなく、むしろがんばつていこうという意気込みであった。
考えてみれば、このころが、情熱に満ちた貴重な日々であつたと、なつかしく思われる。

る。
いろいろ考えてみると、今後は、指導内容の充実、指導技術の向上など、専門性の高揚を図り、一步一歩着実に歩みをすすめていきたいと思う。

それから六年を経て、ふと立ち止まつてみると、精一杯取りんできたといふ満足感と充実感はあるのだけれども、なにかしら一抹の不安、こころもない思ひが、心をよぎるのである。何か大切なものを忘れてきたのではないだらうか。

運営方法はこれでよかつたのだろうか。確固とした土台を築けたのだろうか。という思いにとらわれる。

目を見張るばかりに成長してゆく子どもたちを前に、たゆまず努力を続ける教師をめざして、際限のないこの教育の道へ、再スタートしよう。……

当時の家庭通信を開いてみると、こんな文が記されている。

「ここに第一歩を踏み出し、生まれたばかりの幼稚園です。揃っているのは、子どもたちと教師ただそれだけです。でもこれで十分です。若さと情熱と何よりも身につけたばかりの新幼児教育で指導にあたっていきます」と。

今、多少恥ずかしい思いもするが、我ながらとも新鮮に受けとれる。

史 に、なにを残し得たのだろうか
という問いに、胸を張って答えること
ができるものがあるだろうか。
どうにか軌道にのせてきた、それだ
けで精一杯であったような気がする。
そして、何よりも今、教務係という
立場になり子どもたちとの交流が疎遠
になってしまったことは、教師として
深く反省させられる。教務の仕事をし
ているということに対する甘えがでて

(北会津村立川南幼稚園教諭)